審査の結果の要旨

氏名　平野　真理

近年、メンタルヘルス領域でレジリエンスが注目されている。例えば、震災等でトラウマ体験をした被災者の多くは、PTSD を発症せずに回復する。これは、心理的傷つきからの回復力であるレジリエンスを持っているからである。そこで本論文は、人はどのようにしてレジリエンスを習得するのかに関する知見を得て、回復力を高めるサポートの在り方を探ることを目的とした。論文は、レジリエンス形成の生得的な資質的要因と後天的な獲得的要因を分け、後天的にレジリエンスを高める方法を探るという研究目的を示した第 1 部（1－3 章）、両要因を分けて捉える手続きを提示した第 2 部（4－5 章）、両要因を比較し、それぞれの特徴を明らかにした第 3 部（6－7 章）、両要因がどのように傷つきからの立ち直りを導くのかを検討した第 4 部（8 章）、研究を総括する第 5 部（9 章）から構成される。

第 1 章では “レジリエンス要因は誰もが同じように身につけることができるのか”との問いを提示し、第 2 章では研究レビューに基づき、レジリエンス要因には生得的な個人差があるため資質的要因と獲得的要因を分ける必要があることを示し、第 3 章では“資質的要因が少ない人がレジリエンスを高めるにはどうしたらよいか”との課題を明らかにした。

第 4 章では、既存尺度項目を整理し、両要因を分けて捉える二次元レジリエンス要因尺度を作成し、大学生ら（N=759）を対象とした質問紙調査の分析により資質的要因（楽観性、統御力、社交性、行動力）と獲得的要因（問題解決志向、自己理解、他者心理の理解）の二次元構造を確認した。第 5 章では、二次元レジリエンス要因尺度の妥当性を、中高生を対象とした質問紙調査（N=662）及び双生児法（N=112）によって確認した。

第 6 章では、ライフイベント尺度を用いてライフイベントを経た時間的変化（3 か月後）を両要因間で比較検討したが、顕著な違いはみられなかった。第 7 章では、大学生ら（N=435）を対象として、心理的リスクとしての敏感さ尺度と二次元レジリエンス要因尺度との関連性を検討したところ、資質的要因には敏感さを補う効果があるのに対して獲得的要因には補う効果は示されず、両要因で導くレジリエンスの質が異なることが示唆された。

第 7 章では、両要因がどのようにレジリエンスを導くのかを検討するために、傷つきからの立ち直り体験に関する自由記述を、テキストマイニング（中高生 N=670）と KJ 法（大学生 N=269）で質的及び量的に分析した結果、両要因が異なるコーピングスタイルと関連することが示され、資質的要因が少なくても獲得的要因の多い人は「教えてもらう」サポートを得ながら積極的コーピングを用いていることが示唆された。

第 8 章では資質的要因の個人差を踏まえた臨床心理的支援のポイントを具体的に示した。

本論文は、資質と獲得の観点から概念整理をして尺度を作成し、レジリエンス要因には資質的な個人差があることを明らかにしたうえで、資質的要因の少ない人が後天的にレジリエンスを高めるためのサポートの具体的方法を実証的に示した点で特に意義が認められる。よって本論文は、博士（教育学）の学位を授与するに相応しいものと判断された。